〈解　説〉

劉向と列女伝

宮本　勝

『列女伝』の作者は、前漢の劉向（前七九―前八年）である。伝記は『漢書』楚元王伝に見える。以下、主にこの劉向伝に依りながら劉向が『列女伝』を編纂するに至った経緯の概略を述べておこう。

㈠　劉　向

劉向は漢代を代表する碩学である。その業績は、経学・諸子学・歴史学・五行思想・古典の校訂・詩賦など、当時の学術文芸のあらゆる領域にわたって厖大な仕事を残している。とりわけ、当時における現存書目録ともいうべき『七略別録』の作成は、中国古代学術史の研究に対してどれほど大きな貢献をしたか測り知れない。この書物自体は亡んで伝わらないが、班固が『漢書』芸文志（漢代の古今書籍分類目録）の中に取り入れたので、完全ではないにしろ、まことに貴重な資料として残った。劉向が大学者として評価されるのは、実はこの『七略別録』に負うところが大きく、中国における目録学の鼻祖とも称せられるのである。

これに対して『列女伝』の編纂は、このような学究としての関心とはまた別の側面から発したもので、当時の政治的社会的諸情況と密接な関わりがある。

劉向は、漢の高祖劉邦の末弟、楚元王劉交の五世の孫で、漢の宗室の一員として、宣帝、元帝、成帝の三代の天子に仕えた。特に成帝の時には、漸く衰微に向う漢帝国の前途を憂え遊り、宗室の長老として、いわば天下の御意見番をもって自ら任じていたようである。

成帝の時の政治情況は、成帝の母、王皇太后を後楯として弟の王鳳が大将軍となって権力を握り、国政を専らにしていた。漢室の衰退の原因はこの外戚の専権にありと見た劉向は、王氏一族の排斥を決意する。

劉向の外戚に対する基本的見解は、「公族は国家の枝葉である。枝葉が落ちれば幹は剝き出しで庇護するものがない。方今は同姓の王侯が疎んぜられ、母方の一党が専政している。禄位が公室を去り権力が外戚にあるのは、漢の宗室を強固にし、社稷を保守し、後嗣を安泰にする所以ではない」というもので、宗室の一員としての責任を強く自覚している。

このような立場から王氏排斥を天子に進言するのであるが、劉向はその決意のほどを語って、「外戚がこのように日ましに盛んになっては、やがて必ず劉氏を危うくするであろう。わしは幸いに同姓のはしくれに連なって代々漢の厚恩を蒙り、身は宗室の遺老として三代の天子に仕えてきた。このわしが諫めなければ誰か言うべき者がいようぞ」と親友に漏らしている。諫言の内容は省くが、漢室の衰微を憂うる真情に溢れている。成帝も劉向の心情は充分に諒解しつつも、王氏の勢力に如何ともしがたかった。

王鳳の甥、王莽が前漢王朝を覆したのは、劉向の卒後わずか十三年のことであり、当時の政治的客観情勢も、後世の歴史家范曄が、「前漢は外戚によって帝位を失った」（『後漢書』宦者列伝論）と評しているように、劉向の危惧と全く一致していたのである。

㈡　『列女伝』の制作

『漢書』の作者、班固は成帝の時代を「趙氏が後宮を乱し、外戚が朝廷を専らにした」（成帝紀賛）と評している。趙氏とは成帝の皇后となった趙飛燕とその妹である。劉向もすでに班固と同じ認識を持ち、外戚王鳳一族の専横を憎むと同時に、趙氏の後宮風紀の紊乱や、成帝自身の淫奔な性癖が漢帝室を内部から蝕んでいることを知っていた。劉向伝には、劉向の『列女伝』編纂の動機と目的とを次のように述べている。